

第6章

特別寄稿



辛亥革命・留学生派遣記念碑

奥井 勝二

千葉医科大学初代学長の三輪徳寛先生は長期間外科教授として、多くの業績を挙げられた。本稿に於いては明治44年（1911年）中国の辛亥革命時、中国留学生の「母国に帰り救急医療を行いたい」という強い希望を入れ、戦時医療、救急医学等の講義を行なったことに対し感謝して記念碑を建立した経緯をたどりたい。現在千葉大学医学部本館前の庭園に文字は読み取り難い記念碑がある。この記念碑は永いこと旧病院の第二外科医局の脇道沿いの木立の中に立っていたが20年位前に現在地に移されたものである。

明治44年は辛亥に当たり、その頃中国人民は清朝に対する反感が高まりこの王朝を打倒し、新しい中国を再興し発展させようとする革命運動が起り、その中核的指導者が孫文であり、清王朝が倒れたのが辛亥革命である。その当時千葉医学専門学校はじめ全国の医学校に多くの中国からの留学生が多数おり、母国に帰り医療行動をしたいという希望が高まり学生運動が起った。千葉医学専門学校は荻生録造校長であり、外科の三輪徳寛教授、筒井八百珠教授、内科の井上善次郎教授等が中心となり救急医学、戦時医学の教育、母国に持参する医療器具、薬

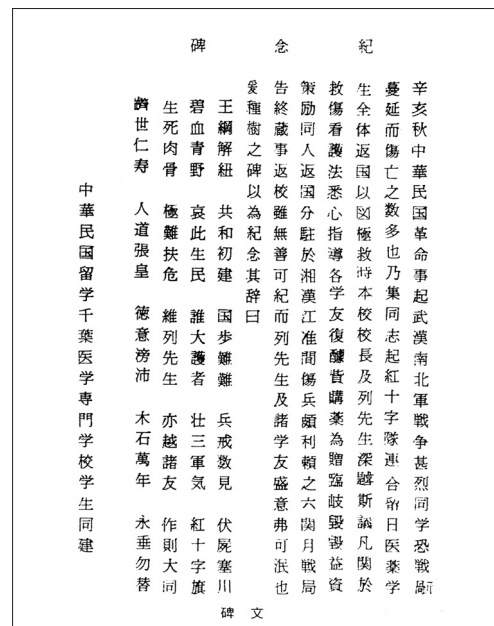
辛亥革命・留学生派遣記念碑



品等の調達にも努力した。さらに外科教室の鈴木寿賀治医師（明治36年卒）を指導教官として同行させた。革命終了後全員復学し卒業した。彼等の感謝の気持で記念碑建立となった。（記念碑並びに碑文は写真参照）

元千葉県立衛生短期大学学長の澤田勤也先生（昭和28年卒）はこの記念碑の意義を尊重し、中国の研修医に頼み刻文を写し翻訳して貰った文章を紹介する。

辛亥の秋、中華民国に革命発生し、武漢で南北軍戦争が激化、留学生は医、薬で赤十字隊を編成し、救国に参ずるべく帰国す。その時、本校校長、先生、学生たちは救護法を誠心指導してくださり、薬品を頂き帰国し、湘南、武漢、安徽に赴いて傷兵を救護し、6カ月後無事帰校することができた。諸先生、諸学友の誠意に感謝し、記念碑を建立した。その碑にいわく、「清朝皇帝が退位し、共和政治が建てられ中華民国となったが、戦争は絶えず、屍は川を塞ぎ、山野は血ぬられている。人民の悲しみは誰が護ってくれるであろうか。三軍を励ますのは赤十字の旗、危機を救う。先生、学生たちは極めて公平に平和を願っている。仁寿を致し、人道を広め、徳意が世の中に盛んである。樹を植え、碑を建て万年永くたたえる。」



注：456頁 補注参照

以上の様な経過で記念碑はたてられた。三輪徳寛先生はじめ多くの先人達の留学生を思う気持の表れである。これらの事柄は日中友好の礎となればと思ふ処である。

引用文献：千葉大学医学部八十五年史、千葉大学医学部百周年記念誌
小島淑男：留日学生の辛亥革命
澤田勤也：いずみ 1998, NOV.

（おくい かつじ）

千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生たち

見城 悌治

はじめに

亥鼻キャンパスの医学部本館前に、一基の記念碑が建っている（写1）。多くの学生・教職員たちは、碑の存在をあまり意識せずその前を行き交うが、それはおよそ百年前の1912年に、千葉医学専門学校（当時）在籍の中国留学生たちが建てた辛亥革命



写1.現在の記念碑

命をめぐる「感謝の碑」であり、近代日中関係史において非常に意味を持つモニュメントである。

千葉大学医学部の前身にあたる千葉医学専門学校（1901～22年。以下、医専と略）、また千葉医科大学（1923～49年。以下、医大）時代の本学は、少なくとも数の留学生を受け入れていた。そして、その留学生たちのある者は辛亥革命への関わりを持ち、またある者は中華民国建国期の医学教育に貢献していくのだが、『医学部八十五年史』や『百周年記念誌』は、そうした史実についてはほとんど触れていない。

21世紀に入り、大学における研究・教育の国際化や海外との人的交流は一層加速化している。こうした折柄、千葉医専・医大時代の留学生をめぐる歴史を顧みることは、現在と未来に何らかの示唆を与えてくれるものと考え、以下、簡単に叙述するものである。

1 近代日本の留学生受入れと千葉医専

①千葉医専における留学生の受入れ

千葉大学医学部135年の歴史の中で、最初に受け入れた留学生は、1899年（第一高等学校医学部時

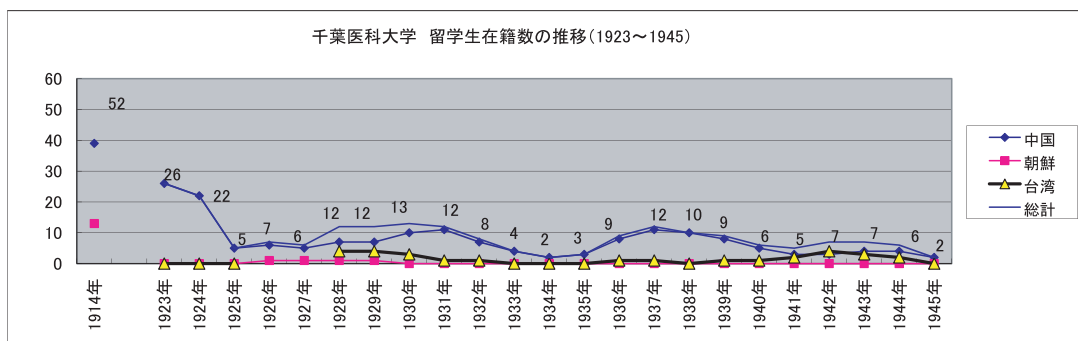
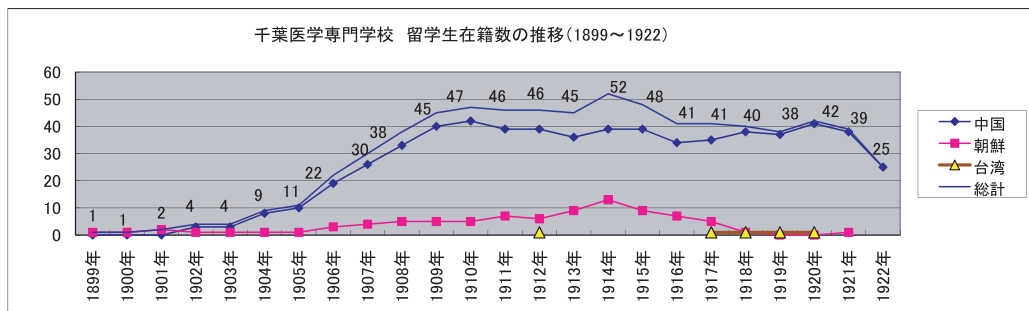


表1. 千葉医専・医大における留学生在籍数の推移
 出典：見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」
 「国際教育」第2号

代)の朝鮮学生(1名)であった。また、官立千葉医学専門学校へと組織変えされた1901年には、清国留学生をはじめ受け入れている。表1は、1899年から1945年までの千葉医専・医大が受け入れていた年次別留学生在籍者数を、中国・朝鮮・台湾の学生数および三者の総計に分けて、グラフ化したものである。これによれば、留学生の大多数は中国(清国・中華民国)学生たちで、日露戦争後の1906年から数が急増し、在籍数40名台の状況が十年余り続いた。しかし、1925年からは急減し、以後は10名あるいはそれ以下で推移したことがわかる。また、多数勢力であった中国留学生に限定した年次別入学者数をまとめたものが表2である。これを見ると、1906年から1921年までは(辛亥革命の影響を受けた1912年を除き)、毎年10名を越える新生が入学していたこと、1922年以後はきわめて少なくなったことが分かる。

この千葉医専・医大の留学生受け入れ数の変遷を、近代日本の留学生受け入れ史全体に照らして、位置づけ直しておこう。

日本が受け入れた最初の留学生は、1880年代の朝鮮の若者であった。また中国については、日清戦争に敗れた清朝政府幹部が、「西欧化に成功した日本に学ぶ必要がある」と冷静に分析し、1896年に13名の留学生を派遣したのが、その始めであった。その

後、中国留学生の数は年々増加していく。とりわけ、1905年に、中国で千年以上にわたり続けられてきた科挙制度が教育の近代化を進めるため廃止されたこと、同じ年に日本が大国ロシアとの戦争に勝利したことは、日本留学生を加速的に増やし、日露戦争後にはその数が、1万人を越えたと言われる。

日本にやってきた中国人留学生たちは、教育設備が充分とは言えない私立学校において、1年か一年半で課程を修了する「速成教育」を受ける人が大多数であった。そして、大学などの高等教育機関は収容人員が少なかったこともあり、本格的な学問や専門技術を学ぶことができた留学生はきわめて稀であったという。

②「五校特約」の時代

そこで、清国側は、1907年日本政府と協議し、留学生の出身省政府の経費負担によって、5つの官立学校へ入学できる特別枠を得た。すなわち、第一高等学校(現 東京大学教養学部)が65名、東京高等師範学校(のち東京教育大学、現 筑波大学)25名、東京高等工業学校(現 東京工業大学)40名、山口高等商業学校(現 山口大学経済学部)25名、そして、千葉医学専門学校(現 千葉大学医学部・薬学部)は10名、総計で165名の留学生を1908年から15年間受け入れることとしたのである。

この「五校特約」で選抜された留学生には、毎年

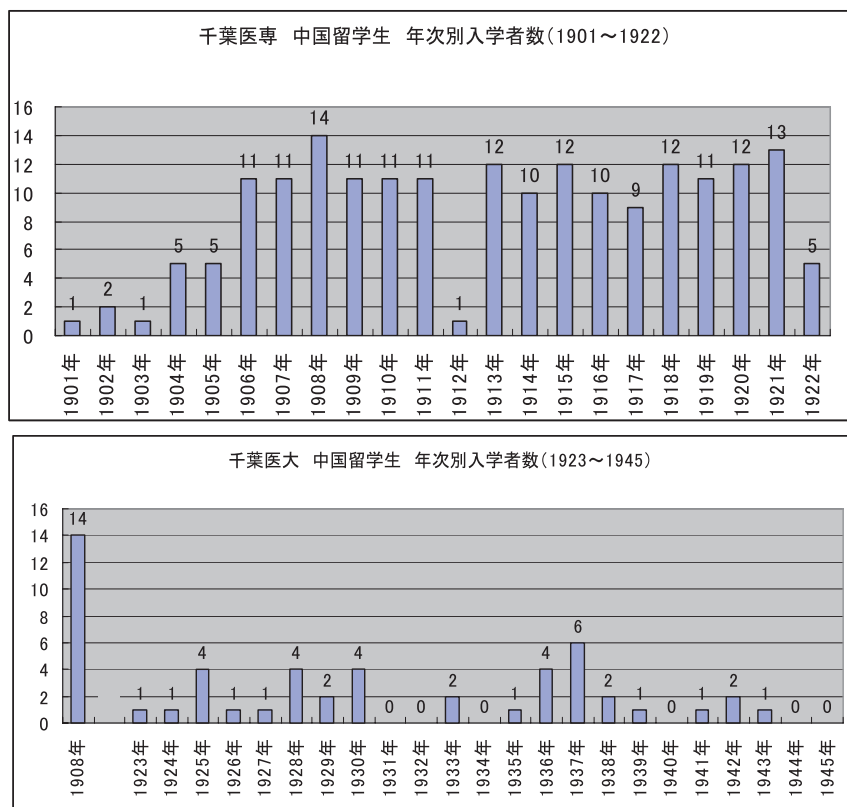


表2. 千葉医専・医大における中国留学生年次別入学者数

出典:見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」
「国際教育」第2号

第6章 特別寄稿

学費と教育費（補助費）として1人650円が支給され、辛亥革命で清朝政府が倒れた後も継続されていた。

この制度は、千葉医専の留学生受入において、非常に大きな意味を持っていく。明治末期から大正期における千葉医専の医学科1学年の日本人在籍者数は、全体で100～110名程度、一方、薬学科は20名前後であったが、在籍生のそれぞれ一割程度（10名および2名程度）の留学生を「五校特約」時代においては受け入れていた。すなわち、表2で見たように、新入留学生が1908年以降、安定して10名前後であったのは、この制度に拠るものであり、また入学者が大幅に減っていくのは、それが廃止された1923年以降のことである。このカテゴリーの学生が卒業した1925年の在籍生は、たった4名となり、最盛期の1割程度となってしまう。

表3は、1899年から1945年までの間の千葉医専・医大に入学した留学生271名の国・地域別、学科別一覧である。中国（清国、中華民国）籍の学生が、83%（224名）の圧倒的多数を占め、朝鮮は30名で11%、台湾はさらに少ない16名（6%）の在籍に留まっていた。さらに、専門別では、医学専攻が198名（73%）、薬学専攻が73名（27%）の割合であった。

ここまで、千葉医専・医大における留学生受け入れの変遷などを一瞥してきたが、千葉医専留学生受け入れの特色を全国の官立学校との比較において確認

しておこう（表4）。

1907年に文部省直轄学校に在籍していた中国留学生は368名おり、その中では東京高等工業学校（現、東京工業大学）が最大の73名を引き受けていた。また、医薬系では、千葉医専の18名が、他を大きく引き離し、1位だった。

その7年後の1914年に至ると総数は666名となり、1.8倍もの増加を見ている。医薬系では、千葉医専が38名と倍増。その他の医専では、長崎医専が1名から28名に、岡山医専が0から12名に大きく数字を増やしている点が注目される。

医薬系は教育・学問の性格上、他の教育分野に比べ収容能力に限りがある。そうした意味からも、千葉医専が全国でトップの40名前後の留学生を長年にわたり受け入れていたことは正しく認識・評価されるべきであろう。

中国留学生たちは、学問吸収を積極的に行ない、最先端の研究成果を共有するため、日本でたくさんの雑誌を発刊した。その中には、革命思想の理論雑誌『民報』などが含まれていたが、千葉医専の学生は、1907年1月に、『医薬学報』と題する雑誌を「中国医薬学会」の名の下で発刊している。さらに千葉医専薬学科の面々は、東京薬学専門学校、東京帝大薬学科等の留学生と1907年、「中華薬学会」を設立した。1917年4月には『中華薬学会雑誌』を発刊した。それぞれの雑誌は母国にも影響を与え、中国医薬学の発展に寄与したと伝えられる。

地域名	医薬別	入学者	卒業者	卒業率	中退者	中・卒不明
中国	医学	165	116	70%	46	3
	薬学	59	50	85%	9	0
	計	224	166	74%	55	3
「満州」	医学	0	0	0%	0	0
	薬学	1	0	0%	1	0
	計	1	0	0%	1	0
台湾	医学	6	2	33%	4	0
	薬学	10	7	70%	3	0
	計	16	9	56%	7	0
朝鮮	医学	27	19	70%	8	0
	薬学	3	1	33%	2	0
	計	30	20	66%	10	0
計	医学計	198	137	69%	58	3
	薬学計	73	58	79%	15	0
	総計	271	195	72%	73	3

表3. 千葉医専・千葉医科大における在籍留学生数(1899～1945年)
 出典: 見城「戦前期留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価」
 『国際教育』第3号

学校類別		学生数	
		計	学校名 (学生数; 1907年 → 1914年)
帝国大学		45 → 101	東京 (35→45)、京都 (10→20)、東北 (※→33)、九州 (※→3)
官公立大学		19 → 0	札幌農科 (19→0)
高等師範学校		46 → 82	東京 (44→72)、広島 (2→4)、東京女子 (※→6)
官 公 立 専 門 学 校	高 校	55 → 134	一高 (31→62)、二高 (5→14)、三高 (13→13) 四高 (0→5)、五高 (3→11)、六高 (0→11)、 七高 (6→10)、八高 (0→8)、
	高等農業	9 → 10	盛岡 (9→0)、鹿児島 (※→10)
	高等工業	98 → 198	秋田鉱山 (※→4)、東京 (73→140)、京都工芸 (2→9)、 大阪 (23→30)、名古屋 (※→14)、熊本 (※→1)
	高等商業	41 → 42	東京 (41→27)、神戸 (※→3)、山口 (※→5)、 長崎 (※→7)
	医学系	19 → 79	千葉 (18→38)、金沢 (※→1)、岡山 (※→12)、 長崎 (1→28)
	その他	28 → 1	東京聾啞 (1)
計		368 → 666	

表4. 文部省直轄学校在籍中国留学生数の変遷(1907年→1914年)

(※印は1907年に創立されていないか、留学生受け入れがなかった学校)

出典: 外務省記録文書「在本邦清国留学生関係雑纂 第一, 第二」(二見剛史・佐藤尚子「中国日本留学史関係統計」国立教育研究所紀要第94集(アジアにおける教育交流)1978年, から作成。

2 辛亥革命と千葉医専留学生

① 紅十字隊の組織と千葉医専の支援

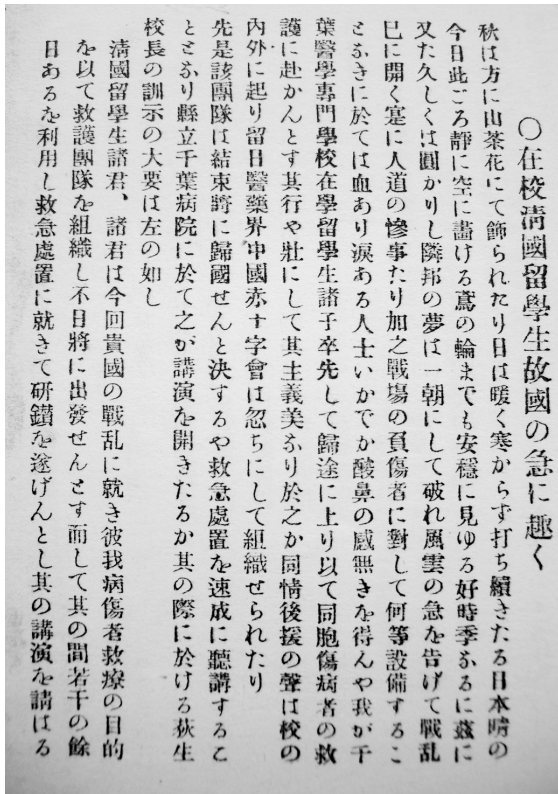
1911年10月、湖北省武昌での武装蜂起を発端とし、翌年1月には孫文を臨時大統領とする中華民国臨時政府が南京に樹立された。世に言う辛亥革命である。この革命が勃発した時、千葉医専には約40名の中国学生が在籍していた。彼らは「いずれも、志士揃いで、すでに前年から革命運動に参加していたものもあった。学生は会議を開き、硬軟二派に分れた時は、鉄拳の雨も降るといふ騒ぎであった」(鈴木要吾編『三輪徳寛』)という回顧が日本人学生によって残されているほど、みな革命への関心が高かった。実際に、千葉医専学生の方声洞と喻培倫は、同年4月の広州蜂起に参加し、落命している(彼らは、革命の先陣を切った「黄花崗72烈士」の中の2名として、今日でも讃えられている)。

革命勃発から2週間後の10月27日付『東京朝日新聞』に、「千葉医専留学生と革命」という記事が掲載されている。「千葉医学専門学校留学生は、清国の今回の動乱について、表面上は何気ない様子を装っているが、事実はそうでない。同校留学生39名

中、モンゴル族の一人を除くほかは、ことごとく広東四川その他南清の出身であるため、今回の動乱については、革命軍に同情を寄せ、ひたすら勝利成功を祈りつつある有様である(略)しかしこれら学生は清朝政府から、医学校月謝および毎月33円を支給されている関係から、すこぶる慎重な姿勢を示している」云々。

千葉医専の中国留学生たちは、革命を支持する気持ちを持っていたが、打倒対象となる清国から「官費」をもらっていたことなどから、どのように対処すべきか、大いに苦慮していたようだ。

何度も議論を重ねた千葉医専の留学生たちは、最終的に、革命軍のみの支援でなく、清朝軍、革命軍を分け隔てなく救護する「紅十字隊(赤十字隊)」を組織し、祖国に赴くことを決定する(写2)。10月30日付『東京朝日』には、千葉医専の留学生が協定した条項——赤十字精神に基づく行動をする事、横浜・神戸の華僑から義捐金を募る事、日本に留学する他の医薬生に対し、協力を求める事、戦闘が終結したら、ただちに日本に戻り、復学する事などが示されていた。さらに、千葉医専教授の三輪徳寛



写2.『千葉医学専門学校 校友会雑誌』1911年12月号

る場は多くあったと思われる。

講習会が終わった11月9日、中国に向けて出発する留学生たちのための壮行会が、千葉医専に在籍する日本人在校生および教職員たち650名によって、亥鼻キャンパスで開かれた。参加者は、薬品や衛生資材を購入するための資金として、一人50銭ずつの寄付を行ない、また壮行会が終わると、全員で千葉駅まで行進し、万歳の歓呼の中、留学生たちの見送りをしたと言う（『千葉医学専門学校校友会雑誌』1911年12月号）。

千葉医専留学生たちは東京に着いたのち、他学校の学生と「留日学生同盟中国紅十字隊」を組織し、出発の準備を整えていった。全国の医学校や研究機関に在籍していた中国医薬生からの参加希望は140名にも上ったとされるが、この大所帯をまとめる隊長に就いたのは千葉医専4年の陳任樑だった。また、副隊長に王曾憲（東京帝大3年）、理事長には呉亜良（千葉4年）が選ばれた。幹事は4名おり、李定（千葉4年）、李垣昌（同4年）、丁求真（同3年）、劉之綱（同2年）が、また書記には何煥奎（千葉3年）、蕭登（千葉薬科3年）が就いた。（『国民新聞』11月18日付）。つまり、組織運営の中核は、ほとんど千葉医専関係者が担う形になっていたのだが、それは、彼らが、全国の医薬生や華僑に支援を求めた当初の動きなどが、同胞たちからの高い信頼と評価を集めたためであろうと思われる。

さて、このように準備を重ねた留学生たちは、ついに11月18日、神田の旅館から「中国紅十字会」等の旗を翻しつつ（写3）、医療器械・薬品等百余個の大小荷物を、馬車2台・荷車2台に載せ、新橋駅に向った。その途中にある三越呉服店では、留学生に茶菓の饗応や記念撮影まで行われたと伝えられる（『時事新報』11月19日付）。これなども、留学生たちが人道的支援のために母国に赴くことが、市民の関心や共感を呼んでいたことを窺うことのできる逸話であろう。

そして翌日には、千葉医専関係者を含む多くの見送りのなか、横浜港を発ち、一路上海に向ったのである。

②中国大陸での救援活動

11月26日に上海に到着した留日学生紅十字隊120名は、ただちに中国各地に派遣された。千葉・東京・名古屋・京都・岡山などの医専学生たちは、甲乙二隊に分けられ、陳任樑（千葉医専）を隊長とする甲隊は湖南省長沙に、孫家樹（京都府立医専）を隊長とする乙隊は江蘇省浦口と江西省九江に赴いた。

から紹介された千葉医専OBの鈴木寿賀治を紅十字隊顧問医に委嘱することも決めた。

辛亥革命勃発時の千葉医専校長・荻生録造は、「戦争勃発に際し、なるべくその惨害を小ならしめるに努めるは、文明の精神を發揮する所以にして、その第一手段は傷病者に対する衛生設備を完全にすることにあり」（『東京朝日』11月5日付）という考えに基いて、三輪徳寛等とともに、留学生たちに応急医療技術の講習会を施すこととした。11月1日から8日の間に実施された講習会では、外科の専門家である三輪が「創傷療法」を担当したほか、筒井八百珠「外科手術」、井上善次郎「内科学」、荻生録造「眼科学」、平野一貫「調剤術」、森理記「包帯および担架術」、岩槻「看護法」等の講義が行われた。とりわけ三輪は講義の際、岳父の高松凌雲が戊辰戦争時に箱館で、官軍・幕軍を問わず医療活動をした精神を引き合いに出して、留学生たちを激励したと言う（鈴木要吾編『三輪徳寛』）。

このころ清朝政府の衛生顧問として中国に滞在していたある軍医の証言によれば、「清国の軍医の数は多いが、大半は漢方医で、ひどい場合は包帯の巻き方も止血の応急手当も知らず、膏薬のようなものを貼って一時をしのぐ有様であった」（『東京朝日』10月30日付）と言う。このように中国側の医療知識が十分でなかったとするならば、応急医療術などを学んだ千葉医専留学生が、実際の現場で力を発揮す



写3.『日本』1911年11月19日付

千葉医専の学生たちが、主として医療活動にあたった長沙市は湖南省の省都である（余談になるが、この長沙には、現在の千葉大学が積極的な交流活動をしている湖南大学があり、不思議な縁故を感じるところである）。千葉医専学生の活動ぶりについては、当時長沙に在住していた日本人医師・全徳岩蔵の証言が残る（「長沙来東」『同仁』1912年3月号）。

江西省の鉄道局に4年間勤めた全徳は、長沙日本人会の招聘で、1911年10月に長沙に赴任する。直後に勃発した辛亥革命の負傷者救護のため、全徳は湖南紅十字会から、助手50名に速成の医療講習を施すように依頼された。一方、長沙で病院を開いていた黄孟祥（1911年千葉医専卒）からは、彼の病院の手伝いも頼まれ、12月4日からそれに関わる。当初の1週間だけで、負傷兵100名、外来患者120～130名の治療に当たったと言うが、医師は黄孟祥と全徳の2名しかおらず、速成講習を終えた14～15名の助けを得ても、手が足りない状態であった。

しかし、そこに千葉医専学生たちが長沙入りし、状況は一挙に好転する。同年に卒業したばかりの黄孟祥にとって、旧知の学友が多い紅十字隊との連携は取りやすく、円滑な医療活動が進められた。その結果、全徳自身も間もなく自身の医院経営に専念することができるようになった、というのが彼の証言（日本に送った手紙）の趣旨である。

当時の長沙において、外国の医学校を卒業した中国人医師は黄孟祥しかいなかった。そして、革命に伴う負傷者救助で評価を高めた黄は、各方面から重用され、軍務医務科科长、衛戍病院院長、野戦病院組織作り、さらには医科大学計画員などを任されていたとされる。黄の事例からは、日本で医学を学び帰国した元留学生への期待がいかに大きかったかを窺い知ることができるのである。

留日学生による紅十字隊は、湖南省のほか湖北・江西・安徽・江蘇省などの地で、救護活動に当たった。千葉医専留学生たちの精力的な活動は、革命軍幹部の耳にも届く。南京陸軍医院長一等軍医長に就いていた千葉医専の卒業生・王琨芳が、母校の荻生校長に宛てた手紙（1912年3月16日付）には、「荻生校長先生たちから、ていねいに御教示いただいたことを、陸軍部総長の黄興閣下にも伝言しましたところ、深く感謝しております」と記されていた（『千葉医学専門学校校友会雑誌』1912年4月号）。黄興は、孫文とともに辛亥革命を支えた人物であったが、彼からこのようなメッセージをもらったことは、留学生や千葉医専当局者にとって、この上ない慶びであったと思われる。

③留学生の復学と感謝の碑設立

革命の帰趨が落ち着きはじめた4月ころから、留学生たちは漸次キャンパスに戻りはじめ、ほとんどの学生は復学を果たした。そして、その半年あまり後、出発日からちょうど1年後の1912年11月9日に、亥鼻キャンパスの一角に、辛亥革命紅十字隊に対する支援の感謝碑を建設した（写真4）。

その全文は、以下の通りである。

辛亥秋中華民國革命事起武漢南北軍戦争甚烈同学恐禍蔓延而傷亡之数多也乃集同志起紅十字隊連合留日医薬学生全体返国以図拯救時本校校長及列先生深矚斯議凡關於救傷看護法悉心指導各学友復醞貲購藥為贈臨岐殷殷益策勵同人返国分駐於湘漢江淮間傷兵頗利頼之六閱月戦局告終歳事返校雖無善可紀而列先生及諸学友盛意弗可泯也爰種樹立碑以為紀念其辞曰

王綱解紐 共和初建 国歩艱難 兵戎数見
伏屍塞川 碧血膏野 哀此生民 誰大護者



写4. 記念碑落成式

第6章 特別寄稿

壯三軍気 紅十字旗 生死肉骨 拯難扶危
維列先生 亦越諸友 作則大同 躋世仁寿
人道張皇 德意滂沛 木石萬年 永垂勿替

現代日本語に翻訳すると、おおよそ次のような意味となる。

辛亥（1911年）秋、中華民国に革命が起こり、武漢での南北軍の戦争は、甚だ烈しくなってきた。留学生は、戦禍の蔓延にともなって、負傷したり死亡する者が多くなってきたので、同志を集めて赤十字隊を組織した。留日の医学薬学の学生を連合して、祖国に帰り、救援に赴いた。学校校長および諸先生方は、この挙を高く評価して、負傷の治療看護に関して、懇切に指導してくださった。また、学友は資金を醸出して、医薬品を購入し寄贈してくれ、出発に際しては資金計画を拡大して励ましてくれた。留学生一行は、祖国に帰り、湘・漢・江・淮の各地に分駐して、負傷兵の大きな頼りとなった。6ヶ月が経って、戦局は終りを告げたので、母校に帰ってきた。善事の記すべきものは何も無いが、諸先生および諸学友の行為を忘れないように、ここに樹を植え、碑を建てて記念とする。

その辞に曰わく、

王綱紐を解きてより（清朝宣統帝の退位）、共和を初めて打ち建てたが、国の歩みは艱難で、戦争は絶えず、伏屍は川を塞ぎ、山野を血ぬらせている。この人民の悲しみは、誰が護るのであろうか。三軍を励ますのは赤十字の旗、生死肉骨の難を救い、危うきを助ける。諸先生方も学友たちも、極めて公平で平和な世の中を願っている。世の中に仁寿を致し、人道を広め、徳意が盛んになるよう、樹を植え、碑を建てて、万年永く讃える。

これが、百年近く経った今も、医学部本館前に立っている碑文の内容であるが、千葉医専の教員・学友たちの支援、現地に戻ってからの活動ぶりなどが、簡潔で含蓄ある文章として綴られている。千葉医専の歴史の中で、さらには日中交流史の中に特筆されるべき事項と言って良いだろう。

[補注：『千葉大学医学部百周年記念誌』（1978年）の冒頭口絵にも、この碑文全文が掲載されているが、その中に、十字余りの誤転記がある。上記引用で、下線を付した部分が、その誤

字を訂正した箇所である。この修正は、鈴木昭治郎氏（千葉医大附属薬学専門部1950年3月卒業）からのご教示による。記して謝意を申し上げたい。]

さて、母校に復学した後の留学生たちの動向報告が外交史料館外交文書（1913年7月24日付）に残っている。そこにいわく、「千葉医専学生の復学後の行動を内査した結果、同校卒業生で、現在南軍（革命派）の軍医部長に就いている王若巖から、在校幹事の何煥奎に宛てた手紙が届き、『個人として、この際帰国すべき』と書いてあった。そのため、在學生は協議し、夏季休暇中に、何煥奎を代表として視察に向わせた。千葉医専の中国留学生は32名いるが、30名は孫文に近い南軍派で、権力を掌握している袁世凱側にあたる北軍派はわずか2名にすぎない。もし、視察してきた何が、帰国を促すならば、全員が帰国する可能性もある」云々。

これは、内務官僚であった千葉県知事が内務大臣に送った秘密報告である。日本の関係者たちは留学生たちが急いで帰国することを心配していたようだが、実際には、中途退学をせず、知識や技術を修得し、卒業した上で、母国に戻った学生がほとんどだった（たとえば、何煥奎は卒業後、江西省立医学専門学校の教官となる）。そして、中華民国という新しい国家の建設に、それぞれ貢献していくのだが、その事情を次に述べていこう。

3 中華民国における医学教育と千葉医専・医科大卒業生の役割

① 医薬系の帰国留学生における千葉医専・医科大の占める位置

明治末から昭和初期に、日本で学んだ医薬系中国留学生の中で、千葉医専・医大出身者が最も多かったことを示すデータが二つある。一つは、同仁会（日本の医学界が、中国医学界との連携・協力支援を目指し、1902年に設立した団体。日中戦争時には戦争協力をしたと見なされ、戦後は解散させられた）が1930年夏にまとめたデータで、これによれば、800名弱の元日本留学生のうち、千葉医専・医大の卒業生が154名で他を引き離れた第1位になっている（全体の20%）。東京帝大医学部出身者は第3位の90名に留まり、魯迅が一時在籍していた東北帝大医学部に至っては、20名程度の卒業生しかいなかった（表5）。

また、外務省が中国各地の日本領事等に作成を命じた「留学生帰国後の状況調査（1934年）」でも同様な傾向が示されている（外務省外交文書）。この

学 校 名	卒業者数	比 率	学 校 名	卒業者数	比 率
千 葉 医 大	154	20%	東 北 大 医 学 部	20	2%
長 崎 医 大	102	13%	京 都 府 医 大	18	2%
東 大 医 学 部	90	11%	東 京 薬 専	15	2%
東 京 医 専	62	8%	帝 国 女 子 医 専	13	2%
東 京 女 子 医 専	62	8%	金 沢 医 大	10	1%
九 大 医 学 部	37	5%	京 大 医 学 部	9	1%
愛 知 医 大	37	5%	慶 大 医 学 部	7	1%
岡 山 医 大	28	3%	熊 本 医 大	7	1%
日 本 医 大	27	3%	富 山 薬 専	5	1%
大 阪 医 大	24	3%	そ の 他	41	5%
東 京 慈 恵 医 大	21	3%	総 計	789	

表5. 留日中国医学生の出身校(1929年頃まで)出典:『同仁医学』1930年9月号

調査の医学系元留学生総数は421名とされており、出身校別では、千葉医大が86名で第1位（全体の20%）だった。以下、長崎医大65名、東京医専38名、九州医大32名、東京女医専27名と続いている。

薬学系でも、判明している帰国留学生65名のうち、千葉医大薬学科が27名。以下、東京薬専11名、長崎医大薬学科9名、東大医薬8名、富山薬専4名などで、千葉の薬学出身者が全体の4割を占めていた。

これら二つのデータから、帰国留学生中に占める千葉医専・医科大卒業生の割合がきわめて高かったことがわかるのである。

ところで、彼らは帰国後、どのような職業に就いたのだろうか。諸史料から判明した分を便宜的に七つに分けて、数値を示してみよう。まず総数は213である（このデータは、複数の仕事を遍歴した人をそれぞれ一つと数える「延べ数」としている。また中国留学生だけでなく、朝鮮・台湾の卒業生も含んでいる）。最も多かったのは、医学校教官で67名（32%）、開業医が45名（21%）。次いで、勤務医41名（19%）、軍医37名（17%）、会社・工場勤務10名、政府・官庁勤務10名、諸学校勤務3名の順であった。詳細に見ると、朝鮮・台湾出身者で、医学校教官および軍医になった人はおらず、また朝鮮出身者の勤務医が9名、開業医が8名いるため、この数を減じ（総計を196名とし）、中国卒業生間における百分比として改めて算出すると、医学校教官の比率が34%、開業医が19%、軍医が19%、勤務医が16%になる。つまり、中国へ帰国した留学生に限定すると、母国の医学校教官として、若い学生たちの教育に当たった人が最も多かった。

帰国留学生たちの職業的特色を明確にするため、第一高等中学校医学部時代から千葉医科大学までを通じた日本人卒業生3273名（1925年まで）の職業と対比してみよう。すると、日本人卒業生の65%（2099名）は開業医、次いで17%（570名）が勤務医

であった。両者を合わせると80%となり、同校が日本各地で地域医療に従事する医師を着実に養成していたことが伺える（『千葉医科大学一覽』1925年版）。一方、中国留学生たちが医学校教員や軍医に就く比率が高かったのは、新しい国づくりに貢献した人たちが多かったことを物語っていると思われる。

②千葉医専・医科大卒業生が関わった中国のおもな医学校

(A) 浙江省立医学専門学校

漢方医（中医）が大きな影響力を持っていた中国では、西洋医学を教育する学校が創設されてくるのは、辛亥革命以降であったと言う。その先駆の一つが、1912年6月、浙江省の公費によって日本留学組が設立した浙江省立医学専門学校（杭州市）である。同校には、千葉医専紅十字隊のメンバーであった李定・余継敏・丁求真・朱其輝などが、教官を経て、それぞれ校長に就くなど、千葉医専と強い繋がりを持っていた。

1935年3月に、杭州在の外交官が日本に送った外交文書には、同校は「千葉医大出身王佶が校長に就任し、日本留学生出身者が圧倒的の大多数を占めるようになった」と記載されているが、実際この時に浙江医学専門学校の医科専門教官18名のうち、過半数を越える10名が千葉医専・医大卒業生だった。さらにまた薬科の専門教官8名中、2名が千葉OBであった。驚くべき比率と言える。

(B) 北京医学専門学校および北京（北平）大学医学院

北京医学専門学校も、1912年に創立された医学校である。初代校長には、浙江医学専門学校の設立に尽力した湯爾和（金沢医専卒）が就き、千葉医専卒業生も多く、勤務していた。たとえば、辛亥革命前に卒業帰国した方肇は、同校教授となっている。1914年に卒業した朱其輝は、ドイツのベルリン医科大学でも学んだのち、浙江省立医薬専

第6章 特別寄稿

門学校長を経て、1936年、北平大学医学院内科学教授兼付属医院長に就いた。呉祥鳳（元紅十字隊）は1915年に卒業した後、ドイツとアメリカ（ジョンボスキンス大学）へ留学を重ね、帰国。北平大学医学院内科主任教授を経て、1933年同医学院院長となり、北京大学教務長も務めている。

1936年8月に、北平大学医学院を訪問した東京帝大医学部長・永井潜の視察談によれば、訪問時の正教授21名のうち10名が元日本留学生（千葉と九州出身者が各4名、岡山と京都が各1名）であったとされる（『同仁』1936年10月号）。ここでも、千葉医専・医大OBが活躍していた。

(C) 江蘇公立医学専門学校および上海東南医学院（東南医科大学）

1912年、蘇州に設立された江蘇公立医学専門学校でも、4,5名の千葉医専出身者が教授を務めていたが、同校は1924年に閉校されてしまう。それを惜しんだ千葉OBの郭琦元、李祖蔚、湯紀湖、葉曙らが、1926年5月、同校を上海の地で再建し、私立上海東南医学院（のち医科大学）とした（初代校長は郭琦元）。

新中国が成立すると、この上海東南医科大は、地方医療へ貢献するため、安徽省合肥市へ移転され、1952年安徽医科大学として再出発する。その安徽医科大学から、最近千葉大学にもたらされた資料によれば、上海東南医科大に関わった教員（元日本留学生）58名のうち、千葉医専・医大出身者が28名と過半数を占めていること、また東南医大草創期に、当時の千葉医大から医療器具やベットなどが寄贈されていることが明らかになった。これも戦前において、千葉医大が中国の医学発展に貢献していた事例の一つである。

(D) 江蘇省南通医学専門学校および南通医科大学

江蘇省南通市は、清末から民国初期に活躍した民間企業家・政治家である張謇が、日本をモデルとし、近代的教育や社会公益事業を展開した上海近郊の地方都市である（見城他編『近代東アジアの経済倫理とその実践』）。張謇は自らの構想の一環として、南通医学専門学校を設立したが、その学校の責任者に据えられたのは、千葉医専出身（1911年卒業）の熊輔龍だった。熊をはじめとし、同校教官はほとんどが日本留学組で、その後6,7名の千葉医専OBが教授に就いている。また南通市内の医院にも4,5名の卒業生が勤めていたことが明らかになっている。

以上、卒業生が多く勤めていた4つの医学校を紹介

してきた。筆者の調査では、直隸省立医学専門学校、河北省立医学院、山東大学、江西省立医学専門学校、四川省立医学専門学校、広西省立医学専門学校、貴州大学などにも千葉OBがいたことが分かっている。

辛亥革命期や民国建国期は、軍医学校も重要な位置を占めていた。千葉で学んだOBたちは、北洋軍医学校、天津市陸軍軍医学校、北京陸軍軍医学校、北京陸軍衛生材料廠、南京陸軍医院、杭州中央航空学校、湖北第一陸軍医院軍医、山西省綏靖署軍医処第二科長、陝西省防疫処研究科主任、湖南省長沙府軍医課長、広東陸軍総医院軍医、貴州陸軍病院院長、広州第一衛戍病院医務長、広西軍医薬局主任などに就いている。

さらに、OBが就職した政府行政機関も併せて紹介しておけば、北京内務部、北京天壇中央防疫処科長、天津市衛生局科長、杭州市政府衛生局長、国民政府衛生部科長、福建省政府参議などがあつた。変わったところでは、国際連盟中国秘書を歴任した人もいる。

つまり、千葉医専・医大で学んだ留学生たちは、中国大陸のあちらこちらで、近代医学の発展普及のために、様々な形で貢献をしていったのである。

実際の教育や医療実践だけでなく、日本の医学書を翻訳し、母国に紹介する作業にも千葉医専・医大卒業生は当たっている。日本の医学関係者が中国との連携あるいは影響力行使のため設立した団体に同仁会があつたことは、先に触れた。この同仁会は1927年から「華文医薬学書刊行会」を立ち上げ、1942年までに31種類の翻訳書を発刊したが、そこに千葉OBも関わっている。蹇先器（1920年卒、北京大教授）は小澤修造著『内科学』全4巻を翻訳している（第1巻は、呉祥鳳ほかとの共訳）。蹇は、『皮膚及性病学』、『泌尿科学』の翻訳も行なった。茂木蔵之助著『外科学』全3巻の訳者には、李祖蔚（1923年卒、上海東南医大、広西省立医学院教授）、孫遵行（1922年卒、浙江医学専門学校、北平大学教授）が加わっていた。また一方で、千葉医科大教授の長尾美知ほか共著の『小児科対症療法』、筒井八百珠ほか共著『臨牀医典』も、他大学出身の元留学生の手によって翻訳出版されていた。

同仁会はのちに日本の中国侵略の先棒をかついだ軍の協力団体と見なされ、批判されていく側面があつたが、元日本留学生を通じた相互協力関係の構築には功もあつた。とりわけ、医薬書の翻訳活動は、学術性・実用性ともに高く、中国人のニーズにも十分応え、売れ行きが好調であつたという。

おわりに

1928年7月、「中華民國学生留日千葉医大同窓会」の幹事である張效宗（卒業後、上海東南医大教員）が、在日中華民國留学生監督に対し、「千葉医科大学に昇格した1923年以来、我国留学生は資格関係のため同校に入学するもの年々減少する有様である。しかし留日千葉医薬同窓会は、我が中華民國建設の初期に当り、国民の保護、社会衛生の設備は医学人才に待つところは最も大きいと考え、学校当局に留学生のための予科を設けるよう依頼した。大学当局も本校が留学生と特殊の歴史をもっているため、欣然として許諾してくれた。しかし、経費負担は文部省の承認を得ないといけないので、監督処を通じて予科ができるよう働きかけて欲しい」と訴えている史料が残っている（外交史料館所蔵史料）。

ここで張は、千葉医専が「大学」に昇格して以降の現状を嘆きながらも、卒業生が中華民國「国民の保護、社会衛生の設備」に努めてきたことを強調している。千葉医大の側も留学生との「特殊の歴史」を鑑み、予科設置を諾としたとされている。

その3年後（1931年）には、千葉医大2年次在籍生の王烈が、『日華学報』（1931年4月号）に千葉医大の紹介を行なっている。いわく「千葉医大は相当に古い歴史を持って居ります。（略）本学における諸先生方は、吾々留学生に対して、相変わらず非常な熱情と親切を尽され、同級生もよく了解して、互いに心持よく勉学の方面にも交遊の方面にも、国籍を超えて和気藹々としていますから、吾々の本学における学生生活は非常に愉快なものであります。（略）当地は一般の人が儉朴醇厚、風習も良好なので、学校における師友以外の人々もまた親切してくれるのは、心から嬉しく思います」云々。

王烈（卒業後、彼も上海東南医大教員）は、『日華学報』の購読者である中国人受験生に対し、千葉医大の充実ぶり、千葉市民の親切さを強くアピールしようとしていた。このように在籍中国学生たちの千葉医大への想いは熱かったが、「留学生予科」の設置は、文部省当局から最終的に認められず、留学生数が増加することもなかったのである。

しかしながら、それ以前の「特殊の歴史」、すなわち1908～22年の千葉医専時代は、日本留学を目指す医薬系官費留学生の「特約校」となり、多くの中

国留学生が在籍していた。彼らには「非常な熱情と親切を尽」くす教育が展開されただけでなく、学内で様々な便宜と配慮が図られていた。たとえば教授の退職記念会、また教授急逝にともなう葬儀・追悼会など、学校が主催する公的な行事において、留学生たちは必ず「謝辞」や「弔辞」を読み上げる役割が与えられた。つまりは、学校の重要な成員であることを内外に知らしめる機会が確実に用意されていたのである。とりわけ、1911年の辛亥革命勃発時の赤十字隊への支援は、千葉医専関係者の「熱情と親切」が最大限発揮された場面であった。

戦前期日本の医薬系大学を卒業した留学生の中で、千葉医専・医大出身者が最も多かったことも改めて強調しておきたい。1937年7月の日中戦争勃発が、帰国留学生を難しい立場に追い込んでいった側面は看過できないが、総体として千葉医専・医大を巣立っていった中国留学生たちが、中華民國成立後に創設された近代的な医学校の教員に就き、中国の医学の発展に果たした役割は非常に大きいものがあったのである。

留学生たちが体験した様々な歴史を知ることが、千葉大学医学部が二一世紀において国際交流・協力を展開し、発展していくために多くの示唆を与えてくれるであろう。

【付記】本稿は、見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』第2号、2009年3月、および見城『近代の千葉と中国留学生たち』（千葉学ブックレット）千葉日報社、2009年12月をもとにして、再構成したものである。前者には、千葉医専・医大に入学した留学生266名の名簿（名前・入卒年・出身地・卒業後の仕事など）を掲載している。

なお、上記の2著作を公表後、新史料の発見などで、留学生数等に一部補足、訂正が生じた（たとえば、留学生総数が271名になるなど）。本稿では修正後の新データに基づいて執筆しているが、訂正内容の詳細については、見城「戦前期 留日医薬留学生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』第3号、2010年3月を参照されたい。

（けんじょう ていじ）

千葉大学医学部の伝統（千葉医学の伝統）言語化プロジェクト

— 135周年記念事業 —

田邊 政裕

● 経緯

千葉大学医学部85年史が発刊されて50年になる。この書には多くの先達が艱難辛苦の末に現在の千葉大学医学部を築いてきた歴史が克明に記載されている。この中で、鈴木五郎先生が担当された「大学時代Ⅱ」の「おわりに」の最後の段落に「こうして時移り人は変わり、地形環境にまで変化をみるが、大学病院が医育機関として草創以来80有余年の長きにわたり、間断することなくその使命を果たしてきた一筋には、何等の変動もない所に千葉医学の伝統が流れる」という一節がある。「千葉医学の伝統」とは？百人百様の意見があるかもしれない。千葉大学医学部が今後これまでの歴史以上に存続し、さらに発展していくためには、我々の後輩は先達にも劣らぬ努力が求められる。その時、彼らの支えになるのがアイデンティティーとしての「千葉医学の伝統」ではないだろうか。「千葉医学の伝統」を具体的な言葉で表現し、卒業生、在校生、さらに、これから千葉大学医学部を目指す後輩に対して、伝統に裏付けられたアイデンティティーとして掲げるとは、彼らのみならず患者、市民などにとっても強いインパクトになる。135年の千葉大学医学部の歴史を振り返り、次の100年を構想して千葉大学医学部のアイデンティティーを「千葉医学の伝統」として言語化し、それを先輩や我々が共に生きた証として後輩に伝えるプロジェクトである。

● 事業内容

事業内容は以下の如くである。目的：「千葉医学の伝統」を言語化し、周知する。方法：学外者、卒業生、在校生にこのプロジェクトの目的を周知し、「千葉医学の伝統」と考えられる文章、熟語、キーワードを募る。i) デルファイ法に準じて有識者（退官された全教授、現役全教授、本学出身他大学前・元・現教授、ゐのはな同窓会全常任理事、地区ゐのはな会支部長、本学出身現役病院長、県・市医師会理事プラス学内委員からの推薦者：150名程度）から個別に意見を求める（趣旨説明・回答依頼文、回答用紙又はFAX用紙又はeメール、返信用封筒）、ii) ゐのはな同窓会新聞、在校生のメーリング・リストを通して広く意見を求める、iii) 集まった意見を集計し、頻度別に分類し、頻度の高い

意見（全体の1/2）を候補として抽出し、再度有識者にそれらを周知して、選択してもらう、iv) iiiを繰り返し、最終的に残った意見（1～3意見）を「千葉医学の伝統」を表す意見として、「千葉医学の伝統」言語化プロジェクト委員会（学内：鈴木信夫、白澤浩、瀧口正樹、清水栄司、田邊政裕、学外：伊藤晴夫、大井利夫、寺澤捷年、済陽高穂）（敬称略）に提示する。委員会は回答をまとめ、「千葉医学の伝統」を表す言葉を決定する。この企画は135周年記念事業運営委員会（9/28/2009）でその概要が承認され、ゐのはな同窓会臨時常任理事会（10/28/2009）での実施要項の承認を経て正式にスタートした。

● 中間まとめ

千葉大学医学部の卒業生など関係する多くの皆さんから、数々の貴重なご意見をいただいた（文末の一覧表に全てを記載）。その後、3回の意見集約を経て、「千葉医学の伝統」は下記の「獅胆鷹目」、「人間の尊厳」、「まず始めること」に集約された。これらの言葉をもとに「次の100年を構想する新たな千葉医学の伝統」を verbal & visual identity として言語化プロジェクト委員会が下記のようにまとめた。

1. 「獅胆鷹目」について

獅胆鷹目行以女手（したんようもくおこなうにじょしゅをもつてす）（獅子のように細心にして大胆且つ動じない胆力、鷹のように諸事を見通し、判断・解決できる眼力、女手のように優しく緻密な手技）は三輪徳寛先生以来の千葉大学の外科の伝統として受け継がれており、千葉医学の伝統として最も相応しい言葉である。しかし、以下のような問題点が指摘され、結論を出すには、更に検討が必要と思われた。1) 漢文のため一瞥しただけでは、現在の学生、教員にとって意味を理解することが難しい、2) 行以女手に女性に対する固定観念が感じられ、行以仁愛、春風秋霜などの代案が提案された、3) 3回目の意見集約で獅胆鷹目 行以女手18票に対して獅胆鷹目 行以仁愛13票、獅胆鷹目 春風秋霜8票、合計21票となり修正意見が上回った、3) 一方、獅胆鷹目をそのまま言語として残すよりも、これらの要素を全て含む医学部の新たなロゴマーク (visual identity) と

して再生させることが提案された。

獅胆鷹目 行以女手 獅胆鷹目 行以仁愛 獅胆鷹目 春風秋霜	⇒	ロゴマーク： 獅子，鷹，(女)手， ハート(仁愛・春風)
-------------------------------------	---	------------------------------------



工学部デザイン学科の宮崎紀郎名誉教授がデザイン、学部学生の渡邊理恵さんがイラストレーションを担当して作成いただいたロゴマークである。「獅胆鷹目」に医師として必要な態度としてハートを加えた。

2. 「人間の尊厳」について

大学病院の基本理念として既に認められているが、洗練されていて、わかりやすく次世代に伝える平易な言葉として優れている。医学部，医学研究院，医学部附属病院の基本理念として，職員，学生と共に患者へも強くアピールするメッセージ性がある。HARMONY OF HUMANITY, ADVANCED MEDICINE AND EDUCATION は簡潔に HARMONY OF HUMANITY AND ADVANCED MEDICINE とし，「人間の尊厳と先進医療の調和をめざし，次世代に伝える」はそのまま残すことが提案された。附属病院の場合，HPのトップ頁に以下のように表示することが提案された。

千葉大学医学部附属病院

人間の尊厳と先進医療の調和をめざし，次世代に伝える
 Harmony of Humanity and Advanced Medicine

3. 「まず始めること」について

中山恒明先生に由来する千葉大学医学部オリジナルの言葉であり，医療，研究，教育のいずれに対しても，それぞれに取組む姿勢として普遍性がある。最後まで諦めない，イノベーションをやり遂げる意味が込められている。千葉大学医学部の伝統として，そこで学習，診療，研究，指導に携わるすべての人々に具有してほしい姿勢である。米国のシカゴにある国際外科ミュージアムに展示されている中山恒明先生の言葉として Beginning is half the success, not giving up on the way is complete success (まず始めること，始めたらず

めないこと)がある。この英語を begin. continue (.は2つの言葉を結ぶ連結記号)と簡潔に表現し，千葉大学医学部(大学院医学研究院)の学生，医師達の行動指針となる verbal identity としてHP等で以下のように表示することが提案された。

千葉大学大学院医学研究院・医学部

begin. continue*

*千葉大学も「つねに，より高きものを目指して」というメッセージをHPで謳っている。begin. continue は「つねに，より高きものを目指して」の行動規範としても整合性があるように思われる。

4. 医学部に対する提案 — 千葉医学 (Chiba Medicine) について—

現在の千葉大学医学部は1949年に公布された国立学校設置法により，千葉大学の一学部として位置付けられている。しかし，本学には1874年の共立病院の設立に始まり，全国に7校のみ設置された高等(中)学校の中で第一高等学校医学部となり(1887年)，千葉医科大学を経て(1923年)，千葉大学医学部となった(1949年)135年の歴史がある。135年の時間軸まで含めた総体として本学を考えると，60年の歴史のみの千葉大学医学部ではそれを十分に表現することはできず，新しい呼称(概念)が必要になる。

135年間に本学が達成した成果は，育成した数多くの医療者であり，質の高い研究であり，地域医療への貢献である。それは，医育・研究機関としての医学部，大学院，附属病院を始めとする関連の地域中核病院，卒業生からなるものはな同窓会などの成果として継承されている。この135年の伝統とその成果を包括する概念として，「千葉大学医学部八十五年史」にある鈴木五郎先生の千葉医学 (Chiba Medicine) を挙げるができる。千葉医学 (Chiba Medicine) により，60年の歴史の千葉大学医学部に留まらない，本学のアイデンティティを再構築することができるのではないだろうか。

このような医学部，医学研究院，附属病院とその関連病院，同窓会などの組織を包括する最上位の概念として ○○Medicine と総称する言い方が，米国の名門大学では使われている。Penn Medicine, Stanford Medicine, Harvard Medicine などである。創立135年を機に本学も，その伝統と成果を構成員全員が共有する概念として千葉医学

(Chiba Medicine)を導入し、「獅胆鷹目」,「人間の尊厳」,「まず始めること」を本学のアイデンティティーとして活用することを提案する。獅胆

鷹目のロゴマークにも Chiba Medicine を使用した。
(たなべ まさひろ)

初めに寄せられた言葉

(説明は一部省略等, 編集してあります。御了承下さい。)

○獅胆鷹目行以女手

この言葉は, 外科医のみならず, すべての医師が獅胆鷹目で診断をし, 女手でやさしく患者に接するというあらゆる医師の在り方を示していると思っている。千葉大学の特に患者に接する精神を説いたものと拝読したい。

○獅胆鷹目行以女手 遺訓仁愛貫之為民

「獅胆鷹目 行以女手」に教育学部の加藤敏教授にお願いして「遺訓仁愛 貫之為民」を加えてもらいました。これによって全文は以下のような意味となります。「医学, 医療を行うにあたって, 獅子のような全力, 大胆, 冷徹さ, 鷹の目のような諸事を見通し, 理解する知力, 女性の手のように繊細で柔軟な手技を身に付け, 患者を思いやる心を忘れない, それらを貫徹して人々のために尽くせ。」

○人間としての医師が人間としての患者に接する心がいたわりに満ちていなければならない。

医学と呼ばれる学問より前に病人という事実があって, 医術はもとより医学にとってもその真の対象はその病んでいる人間である。

我々医師は病人にいかにか接するかです。千葉大学は学術研究者を養成するよりは, 良き臨床医を育成することに目的を置くべきと考えます。社会は, また患者は研究よりも良き臨床医をもとめているのですから。

○医師と患者の接触面, 臨床医学こそ医学のアルファであり, オメガである

医療を医師と患者という2つの人格の間に成立する技術的・倫理的な営みと見る

川喜多愛郎・佐々木力著「医学史と数学史の対話」より。これらの言葉は, 川喜多先生が千葉医科大学に赴任後, 伝統ある千葉医学に触れられて生まれたものである。医療の荒廃が叫ばれている現時点においても, 医学・医療の進むべき正しい方向性を示していると考ええる。

○まず始めること, 始めたら止めないこと

(Beginning is half the success, not giving up on the way is complete success.)

旧第2外科の中山恒明教授の言葉の英訳です。「始めることが半分の達成につながり, 諦めないことが真の達成につながる」というような意味かと思います。代々受け継がれてきた言葉であり, 旧第2外科出身の多くの外科医のモットーになっています。この英文は, シカゴにある国際外科ミュージアムに中山恒明教授のモットーとして展示されている。

○運・鈍・根 (うん, どん, こん)

旧第2外科の中山恒明教授の言葉と言われています。基礎, 臨床医学を通じてオリジナル (ノイエス) で卓越した仕事を成すために必要な要素を, 運 (チャンス, 思いつき, ひらめき), 鈍 (他人の眼には一見愚鈍にさえ映る研究姿勢で, すでに解明されていることであっても, まず自分の手で基礎からやり直してみる), 根 (最後までそれをやり遂げる) の3文字で言い表しています。

○世界をリードする千葉医学

○基礎と臨床の融和

○生老病死は人生の常態なり。深く想うべし (あるいは深く学べ)。そこに友は見出され, 学 (あるいは医) は起こり, 愛 (あるいは慈) は生まれる。

1. 深い (真実の) 人間観から深い人間行動のすべてが生まれる。
2. 学府の構造を考えると, 友は大きな価値である。
3. 学府としての目標は医学である。
4. 医学を支えるのは自分と同じように人を思う大慈。

○医学は厳しく, 医療は暖かく

モットーとして丸40年臨床の現場と学会活動を行ってきました。これは千葉医学の伝統にも合致するものと考えます。

○第一、大局観確保の力量を身につけよ。

第二、自身の生活する地域密着（千葉、房総）によって生々発展せよ。

○人を育てることは、学を究めることに優る

千葉医学の伝統は、明治の初めから、良医を育てることにあったといえるのではないのでしょうか。高い医療技術や医学への造詣の深さは、医師として求めなければならない目標ですが、それは、高潔な心や弱者への思いやり、不屈の精神など、その人の高い人格の上に立って初めて実現し、また、社会に貢献できるものです。

○継承と創造

千葉医学は、長い間、先達のやってきたことを継承して、その受け継いだものをより創造し、新しいものを作り上げる。これが千葉医学の輝かしい伝統だと考えます。

○伝統の翼に乗り、実践医学の泰斗とならんことを追求せよ

○伝統の継承と改革の相克の中から大きな花開く千葉医学のエネルギー

○自由闊達な学生生活

○思い遣る心を磨き、医に全霊を捧ぐ

思い遣るとは、自然科学を極め人間愛を育むことである。それは、病む人に向け全身全霊を尽くすためである。

○経験医学の中には真理がある

伊東弥恵治の論文の中に「東洋医学を排するものは経験医学だからよくないと言う。私は逆に、経験医学であるから其の中には真理があるとだんずるものである」の言葉がある。理論を排するものではないが、医学においては、理論のみでなく経験の大切なこと、そして千葉医学は、それを掲げてよいように思う。

○人命を預る医師は医するに足る手腕と人格を備えていなければならぬ

長尾精一の言葉

○仁愛の我等が手にて世の禍をすくわん

千葉医学専門学校校歌の一節

○努力を積み重ねて最良の研究と最善の医療を目指して

○常に疑問を持ち、より優れた研究とより良き医療を目指して

○真面目に患者と医学に向き合い、高きを目指す

○市井に立ち至上の医学を志す

○博学於文 約之以礼

滝沢延次郎の好まれたことば、論語より。学理をよく学び、そのすべてを患者に向けなさいということです。

○人には春風をもって接し、医学には秋霜をもって対す

「千葉医学の伝統」の印象は、業績を挙げている割に“地味”である。先輩から、よく千葉大は“いぶし銀”といわれていたと聞いています。これからの千葉大生には我々を乗り越えて先へ進んでほしいと願っています。「社会力を強め学力を高める」意味を表す言葉です。

○自由他敬

医師として、他者すなわち患者、その家族、師、同僚、後輩、社会、世界に対して抱く敬意は、診療、教育、研究に対する情熱の源泉としても、また行動規範としても根幹をなすものであろう。

○人間の尊厳と先進医療の調和をめざし、次世代に伝える

HARMONY OF HUMANITY, ADVANCED MEDICINE AND EDUCATION（千葉大学医学部附属病院の使命）

当時、副病院長であった教授が harmony という言葉をポロリと口にした。その一言で HARMONY OF HUMANITY, ADVANCED MEDICINE AND EDUCATION におもい至ったのである。つまり英語による「使命 mission」が先にできてしまったのである。大学病院である以上、先進医療 ADVANCED MEDICINE の開発と実践ははずせないし、教育 EDUCATION もはずせない。その頃、本邦でも告知、説明責任、患者の自主決定、人権の尊重などに関心が向けられてきて、これらは humanity の概念にふくめ、しかも先進医療 ADVANCED MEDICINE、医学教育 EDUCATION をこえた存在として、キーワードのはじめに位置づけることにした。

